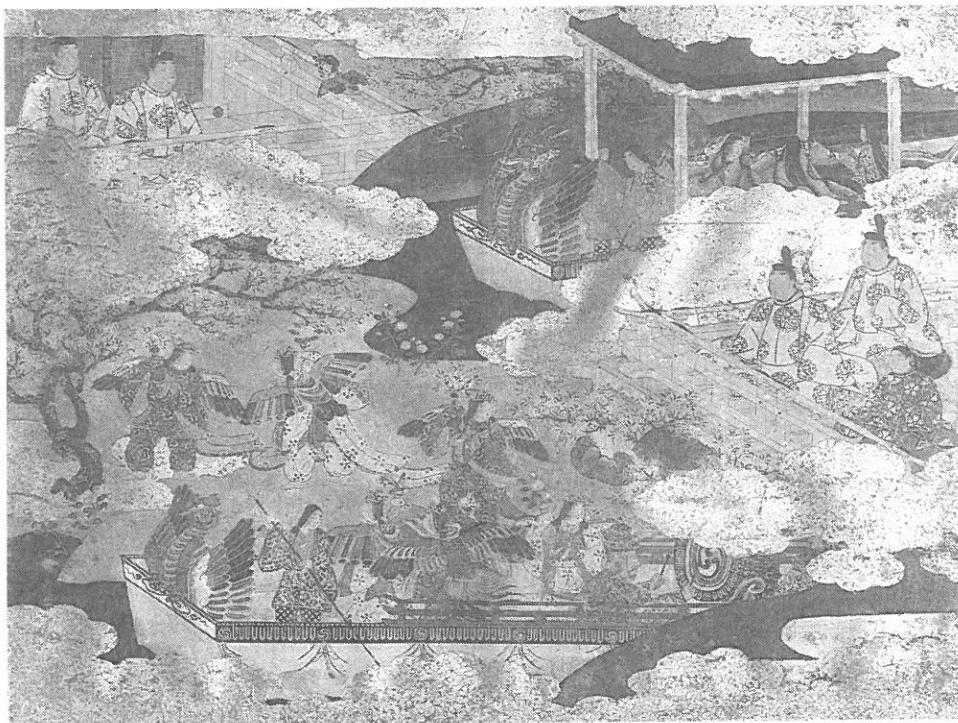


# 和泉市久保惣記念美術館

## 常 設 展 示

### 源 氏 絵



胡蝶より

平成元年 3月1日(水)～3月26日(日)

午前10時～午後5時(入館は4時30分まで)

月曜休館

〒590-02 大阪府和泉市内田町85

TEL. 0725-53-1071

平安時代、十一世紀の初頭、源氏物語が成立して以来、その絵画化すなわち源氏絵は、絵巻、冊子、画帖、扇面、屏風などとして数多く製作され、工芸品にも多く意匠としてとりいれられた。源氏絵は、単独、あるいは数ヶ所の有名な場面を特別に選ぶ場合もあるが、源氏五十四帖の各帖から、ひとつ以上の場面を選びワン・セットとし、情景を視覚的に味わいながらおおよそのストーリーをおえる様に構成されている場合もある。

室町時代末期から江戸時代前期にかけては、土佐派、狩野派、宗達派をはじめ数多くの絵師達により源氏絵が描かれているが、

なかでも土佐派は、画帖など小画面の細密な源氏絵の製作にその腕を揮っている。

今回陳列する源氏物語手鑑はもと四十枚の折帖で、一葉ごとの表裏に、上下に詞書と絵が貼られていたのを都合八十枚の台紙に貼りなおしたものである。改装時には絵の裏に「土佐久翌」の重郭円形印と、詞書の裏に揮毫依頼覺書風の名前とが確認されたというが、台紙の上方の小さい付箋に記されている詞書の筆者名は、おそらくこれに拠ると思われる。いま一番、二二番、四一、六一番の台紙にのみ「土佐久翌」重郭円形印が貼られている。源氏物語手鑑の名称については、もとの帖の表紙の題箋に「光源氏手加々美」とあるところから充てられたのであろうが、残念ながら以上の事以外に改装時の状況は詳らかでない。

詞書の料紙には金銀、まれには墨で秋草、松樹、藤、桜に流水など様々な文様が描きわけられ、一枚として同じ図様はない。寸法は縦十七又は十九センチ前後の場合が多く横は一定しない。筆者については今後研究しなければならないが、付箋に拠ると、鳥丸中納言、飛鳥井中納言、冷泉三位、中ノ院少将、持明院少将など能書家や御家流の書をよくした公家達二十名になる。因に鳥丸家では光廣（一五七九～一六三八）が慶長十七年より元和二年まで権中納言に任官されている。

絵は、五十四帖から、有名な場面を中心に八十選ばれ、土佐派独特の細密な筆致で、金銀をふんだんに駆使し、絵具は鮮麗かつ濃厚である。寸法は縦一九・八センチ前後、横二六センチ前後とほぼ一定である。

土佐光吉（天文八～慶長十八）は、剃髪して久翌（休翌・休欲）と号した桃山期における土佐派の代表的画人である。土佐光茂の門人であつたが、宗家の光元が秀吉に従軍して但馬方面で戦歿した永禄十二年以後は、土佐派を継承し、堺に居を構えて作画活動を行つた。

画の特徴は「動勢なく美細を要る」（『丹青若木集』）、「筆法は専ら規矩を守る」（『本朝画史』）などと土佐派が評されているように、金銀・濃彩を多用した細密画で、大和絵の伝統的技法・作り絵に則つたものである。

『図画考』などの画伝類には、源氏物語小画・秋野日月屏風・利休肖像などが伝えられているが、現存する作品は少ない。わずか源氏物語を主題にした作品が数点知られており、本手鑑は「源氏物語図画帖」（京都国立博物館）とともに、光吉画の基本資料である。金碧障壁画全盛期における絵画制作の一端を知る上で欠かせない。

左のリストは八十枚全部をかかげ、今回陳列のもの四十九枚は上部に○印をほどこした。

付箋番号及び帖名	場面の内容概略
一番	桐壺一
二番	桐壺二
三番	帝木一
四番	帝木二
五番	空蟬
六番	夕顔一
七番	夕顔二
八番	若紫
九番	未摘花一
十番	未摘花二
十一番	紅葉賀
十二番	花の宴
十三番	葵
十四番	賢木
十五番	花散里

付箋番号及び帖名

場面の内容概略

十六番	須磨	源氏二六歳の頃、須磨に退去するが、その年の仲秋の名月の夜、雁のつらなつて鳴く姿に、沖合をながめながら、心情をたくして歌を詠むところ。遠景には、こぎ行く舟、雁の群、右隅に満月を、近く前栽には、萩、薄、紫苑などを配している。
十七番	須磨	(注)付箋帖名は明石一となっているが、詞書・絵とともに須磨の帖の内容を示している。
十八番	明石二	源氏を娘婿にと望む明石入道は須磨から自邸に源氏を迎える。四月のあるのどやかな夕月夜に源氏は弟を、入道が琵琶を奏する場面。庭の秋草は物語の時節にそぐわない。
十九番	明石一	源氏帰京後の住吉詣。帝から賜わった童隨身は美しい装束をし、髪は角髪姿である。朱の鳥居と砂浜に松原で住吉を表わし、偶然同じ日に参詣した明石上は沖の船より、このはなやかな一行をながめている。
二十番	蓬生	源氏が四月のある夕月夜、松にかかる藤に心ひかれて立ち寄った荒廃した邸で、末摘花と再会する場面。蓬の露を馬の鞭ではらうのは惟光。
二十一番	霧標二	源氏二九歳の秋。石山詣の途中、逢坂の関で上洛する常陸介と空蟬の一に出逢う。道をゆずる常陸介一行。後日源氏は空蟬と消息をかわす。
二十二番	関屋	源氏三歳の三月、冷泉帝の妃、梅壺女御と弘徽殿女御が御前で絵合せをするが、最後に、源氏の須磨の絵日記が人々の心をとらえ、源氏の応援する梅壺方の勝となる。この場面は源氏の思慕する藤壺中宮の前に両者の絵を納めた箱が置かれている。
二十三番	絵合	源氏の姫君が紫上の養女となるべく、大井の邸から一条院にひきとられる場面。別れを悲しみ、抱いているのは母の明石上。
二十四番	松風	明石上の寂しさを慰めに大井邸を訪ねた源氏は、紫上の煩悶をよそに、雪の夕暮、桃園宮を訪ねる。西門の錠が錆びついでなかなか開かない。
二十五番	蓬生	桃園宮に住む権(朝顔斎院)に心を寄せる源氏は、紫上の煩悶をよそに、雪の夕暮、桃園宮を訪ねる。西門の錠が錆びついでなかなか開かない。
二十六番	薄雲一	この帖では源氏(三歳・三五歳)は太政大臣になり榮達の途につくことになる。六条には大邸宅も造営され、春の趣き深い庭を配する東南の一画には源氏、紫上、明石姫君、秋の庭を配した西南の一画には秋好中宮(絵合の帖の梅壺女御)東北、西北の一画には花散里、明石上がそれぞれ住んでいる。この場面は、里下り中の秋好中宮が女童に色とりどりの秋の花や、紅葉をもたせて紫上に遣わすところ。その上に中宮の文をのせている。
二十七番	薄雲二	明石上の寂しさを慰めに大井邸を訪ねた源氏。大井川に浮かぶ鵜舟の篝火に我身のつらさを詠む明石上。
二十八番	乙女	桃園宮に住む権(朝顔斎院)に心を寄せる源氏は、紫上の煩悶をよそに、雪の夕暮、桃園宮を訪ねる。西門の錠が錆びついでなかなか開かない。
二十九番	玉鬘一	夕顔の遺児、玉鬘の一行が長谷寺参詣の折、椿市の宿坊で、かつて夕顔に仕えていた右近と出会う場面。画面左下方と横になつているのが玉鬘か。これが契機となり、源氏の耳に届き、玉鬘は六条院に迎えられる。
三十番	玉鬘二	年未、源氏は新春用の衣裳配りをする。おとなびた女房が御衣櫃から衣装をとりだしたり、衣箱にいれて届けようとしている。源氏の傍らの紫上は、衣装の色目、文様などからまだ会つたことのない明石上、花散里、玉鬘達の人柄、個性を想像している。
三一番	初音	源氏三六歳。六条院の元旦、女君達への年賀が華いだ雰囲気のなかで行なわれる。まず紫上方で長寿健康を願う蘭固めの祝をする。
三二番	胡蝶	春、三月二十日すぎ、六条院での秋好中宮の御読経の初日に、紫上は法要の花を鳥、蝶の装束をさせた童にもたせ鶴首の舟に乗せて贈る場面。原文には「……鳥には銀の花瓶に桜をさし、てふは金の瓶に秋冬(山吹をさす)を……」とあるが、画面でも忠実に描きわけられている。紫上としては乙女の帖での秋の花や紅葉の返礼の意味もある。
三七番	螢一	六条院にひきとられた玉鬘は養父源氏から懸想され当然する。
三三番	螢一	美しい玉鬘の評判をきいて思いをよせる螢兵部卿宮が源氏のはからいにより、螢の光で玉鬘を垣間見る場面。几帳ごとに螢とその光がほのかにみえる。
三四番	螢二	五月五日、六条院の馬場で催された騎射の競技と競馬。見物の殿上人も思い思いの装いで集う。
三五番	常夏	夏の暑い日、源氏が東の釣殿で涼んでいる場面。鮎や鰯を調理させ賞味しようとしている。赤い口覆いの瓶には氷水か酒か。
三六番	篝火	五月五日、六条院の馬場で催された騎射の競技と競馬。見物の殿上人も思い思いの装いで集う。
三七番	野分	夕霧が父源氏の名代で秋好中宮の野分見舞に参上し、遠くから目にした光景である。女童達は強い野分に荒された庭の秋草のなか、虫籠を手に露をかわしたり、風でいたんだ撫子を手にとつたりしている。脇息にもたれているのが秋好中宮。
三八番	御幸一	十二月、冷泉帝の大原野行幸の光景。手前には鳳輿(天皇の儀式、行幸に用いる)を配し、帝が大原野に到着した体についている。遠くは狩をする様を、この手鑑では珍しく広い視界でとらえ小画面におさめている。源氏は供奉せずに、御酒などを奉っている。
三九番	御幸二	源氏三六歳の初秋、玉鬘と琴を枕に臥し、歌を贈答する。外の様子は原文の「……いと涼しげなる遺水のほとりにけしき殊にひろごり臥したる檀の木の下に、打松・おどろ／＼しからぬ程におきて……」のとおり。篝火は月がない為、源氏が配慮して、ともさせている。打松とはたいまつ物忘みのため、鷹狩りの行事にお供しなかつた源氏のところへ、冷泉帝より雉三羽をつけた柴の枝が届けられた。
四十番	藤袴	源氏は玉鬘を髭黒大将に嫁がせる決心をする。髭黒は玉鬘を自邸に迎える準備をすすめ、ある雪の夜、玉鬘を訪れようとしたやさき、傷心の北の方に物怪がつき、火取香炉の灰をうしろからあびせる場面。置に炉がきつてあるが当時の習慣にはない。
四一番	真木柱	帖の名は、娘が邸を去る時、柱の刻目に別れの歌を書いた文を挿した事による。
四二番	梅ヶ枝	源氏三九歳の春、二月十日、丁度、雨がすこし降り、紅梅のゆかしい頃、薫物競べが催された。
四五番	若菜一	その夜、源氏は薫兵部卿宮に装束一揃、薫物二壺を届けるところ。
四六番	若菜三	正月二十日頃、庭の梅のさかりの静かな宵、女三宮の部屋での女楽の場面。左端、脇息にもたれているのが明石女御。まんなかが六弦の和琴、(岡では十三弦の筝になっている)を弾く紫上。右が七弦の琴を弾く女三宮。後姿が琵琶を弾く明石上。御簾の外では夕霧が明石女御の弾く筝の調子をあわせている。その横で玉鬘の子供達が笛、横笛を吹いている。
四七番	若菜四	朱雀院五十の賀の試楽。樂人は「仙遊霞」を奏す。髭黒大将、夕霧、螢兵部卿宮の御子達四人は「萬歳樂」を舞う。廊から源氏が見守る。
四八番	柏木一	女三宮を忘れられず、密会した柏木は自責の念から煩悶し、病床に臥してしまう。両親が加持祈禱をさせる為、聖を呼んで対座しているところ。柏木は後、むなしく他界してしまう。女三宮は不義の子薰を生み、髪をおろし受戒する。

## 付箋番号及び帖名

## 場面の内容概略

四九番

柏木二

柏木の死後、落葉宮が寂しく暮らす一条宮を弔門した夕霧。主のいない邸で、変らずに花をつけた桜があはれをもよおす。

女三宮のもとで育つ薰が笛をからうとする様子を、源氏は複雑な思いで、「子は捨てがたい」との意の歌を詠む。横笛とは後に柏木遺愛の笛が夕霧に贈られたことに因む。

五十番

横笛一

柏木遺愛の笛を譲り受けた夕霧の夢に桂姿の柏木の靈が現われ、笛を子（薰）に伝えるようにと告げる。

五一番

横笛二

源氏五十歳の秋、八月十五日の月夜、六条院で女三宮が仏前で念誦しているところへ源氏が訪れ、折からの鉛虫の音に歌を贈答し、琴をかきながら。後向で仏前に閑伽を供えている姿が女三宮。

五二番

鉛虫

柏木の死後、落葉宮が寂しく暮らす一条宮を弔門した夕霧。主のいない邸で、変らずに花をつけた桜があはれをもよおす。

女三宮のもとで育つ薰が笛をからうとする様子を、源氏は複雑な思いで、「子は捨てがたい」との意の歌を詠む。横笛とは後に柏木遺愛の笛が夕霧に贈られたことに因む。

五三番

夕霧一

柏木の亡きあと、その妻の落葉宮に心よせる夕霧は、八月十日すぎ、小野山荘に宮を訪うが、軽々しいわざがたつのを懸念して供の者に大きな声をたてない様に注意を与えている。原文では、日没の頃一面に霧たちこめる設定になつており、遠景の、鹿、龍などは語られていない。後に、御息所亡きあと、落葉宮をなぐさめる為、九月十日すぎの夕方に訪れた時の情景が、この絵の鹿、龍、稻むらなどの様子とほほ一致する。

五四番

夕霧二

藏人少将（柏木の弟）が、雲井雁の父致仕大臣からの文を、夕霧と落葉宮のいる一条宮に届ける。

五五番

御法

病気がちの紫上は出家を希望したが源氏には許してもらえない。三月十日、桜の花ざかりの頃、死を予感して、明石上に明石中宮の三宮（勾宮）を遣わして歌を贈答する。紫上はこの年の八月十四日、惜しまれながら逝去する（四三歳）。

五六番

幻

紫上を亡くして悲しみにくれる源氏は春の花の頃入道宮（女三宮）を訪れる。直衣もことさらやつして無文を着衣。勾宮も共に訪れ薰と走り遊ぶ。女三宮は仏前で経を読んでいる。源氏は山吹の花に目をとめ、これを植えさせた紫上の事を思いしのぶ。幻では、紫上他界後、傷心の源氏の様子を中心に物語が進行するが、年末、源氏は大切な紫上の消息などを焼却させ出家の決心をする。以後物語に源氏は登場しない。

五七番

句宮

賭弓（正月、宮中での競射の儀式）の勝方夕霧は、勾宮ほか多くの君達を六条院に招く。華かな場を好まぬ負方の薰までも無理に牛車に乗せた。（五八、五九番は絵・詞共に前後の順が逆である）

五八番

紅梅一

句宮を中君の婚に望む（按察大納言が、文を一枝の紅梅に添えて句宮に届けた。句宮は氣の進まないまま返書をしたためる）。

五九番

紅梅二

接察大納言（柏木の弟）は、藤原氏の繁榮を願い、愛くるしい姫大君を春宮（皇太子）に奉る。入内する大君を乗せた牛車を描いたものか。

六〇番

総角一

長谷寺詣の帰途、夕霧の宇治の別荘に中宿りした句宮一行は、碁・双六・琴などで憩う。樂の音が伝わり対岸の八宮から文が届いたところ。

六一番

竹河一

大君に心よせる薰は大君から妹の中君を託されたが、かねてから中君に執心の勾宮を宇治に伴う。

六二番

橋姫一

竹河では髭黒他界後、玉鬘やその子女達を中心物語がすすむ。この場面はかねてより大君に心よせる藏人少将が、桜の花びらをかけて碁をうつ大君と中君を垣間見るところ。女童達は薄絵の箱を手に花びらをあつめようとしている。

六三番

橋姫二

冷泉院に参上した大君を思ふ薰は、藤侍従（大君の弟）と院内を歩く。五葉松にかかる藤の花を大君に見立てて歌を詠みかわす二人。

六四番

橋姫三

薰は晚秋、源氏の異母弟宇治八宮の山荘を訪れ、その姫達、大君と中君が合奏している姿を垣間見る。中君が琵琶を前に、撥を玩んでいると、あなたかも扇でまわいたようすに雲間から月がにわかにさし出した場面。大君は笛の手前うつぶせになつていて。

六五番

椎ヶ本

十月、宇治の山荘を訪ねた薰は、八宮の姫君達の合奏が思い出されて、八宮に琴の演奏を所望する。薰も勧められるままに琵琶を合わす。

六六番

総角一

薰は八宮に姫君達の将米を託された後、弁御許（柏木の乳母子）から出生の秘密を知られ、柏木の遺言状などが入った袋を受け取る。

源氏物語手鑑

のほかに左記の十点を陳列します。

大般若波羅密陀經卷第百七十九

紙本墨書

一卷

奈良時代

法華經卷第四法師品第十

紙本墨書

一卷

平安時代

法華經卷第六常不輕菩薩品第二十

紙本墨書

一卷

平安時代

法華經卷第六藥王菩薩本事品第二十三

紙本墨書

鎌倉時代

響銅

金銅

密教法具

一面器

鶴尾形柄香炉

誕生釈迦仏立像

桐文懸盤

山水図硯箱

◎は重要文化財を表わす。

# 源氏物語主要人物系図 —— 源氏物語手鑑に登場する主要人物 ——

